



海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS

United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland

— グレートブリテン及び北アイルランド連合王国 —

海外事情



英国滞在記



高橋 円 TAKAHASHI Madoka
株式会社建設技術研究所／大阪本社／水工部

英国のグループ会社に出向し約2年が経ちました。妻子とともに渡英し仕事・生活面で初体験のことも多く、あっという間でした。本稿では地元住民との交流も含めて英国の紹介をさせていただきます。

英国は日本と同じく島国で北海

道より高緯度に位置しますが、一年を通して比較的穏やかで過ごしやすい気候です。人口は約7千万人、国土は24.2万km²でどちらも日本の2/3程度の規模になります。移民流入の影響により人口はEU脱退後も増え続けており、ロンド

ンだけに限らず多くの都市で様々なルーツの人や店を見かけます。道を聞かれることも多く、「色んな人がいるのは当たり前」となっています。

有名なお飯

英国と言えばご飯が有名です。悪評を耳にすることもあります。それほど酷くはありません。脂っぽいことや味付けに乏しいことも挙げられますが、自分で味付けして楽しく頂くことができます。

有名なブレイクファストはどこでも同じ品質のものが楽しめます、という聞こえは良いかもしれませんが、地域の名産に乏しいのが実情です。南部のブライトンでもイングランド北部のヨークシャーでも同じブレイクファストが出てきます。さらに北のスコットランドまで足を延ばし、ハギス（羊の内臓を羊の胃袋に詰めて茹でたスコットランドの伝統料理）が付いてくる小さな発見をした際は喜びもひとしおでした。

外食は円安の影響もあり非常に高価に感じます。マクドナルドで



写真1 英国料理の代表例



写真2 ロンドン郊外のパブの様子

も一人2,000円程度は覚悟しなくてはなりません。その反面、スーパーで売られている果物や野菜は比較的安価ですので、自炊をすれば家計に優しい生活を送ることができます。なお、食品添加物が少ないため足が早いことに注意が必要です。

パブ文化

会社終わりの飲み会はおっぱらパブでビールの立ち飲みです。フードメニューは頼まないと出てこないパブが多く、何も食べず空きっ腹にビールを次々と流し込みながらしゃべり続けるのが英国スタイルです。次の長期休暇の行き先、家族のこと、趣味の話、最近のニュースなど話題がどんどん変わっていきます。

パブはいつでも賑やかです。午前中はお年寄り、昼過ぎからは若者、夕方以降は仕事終わりの方が合流し店の外まで客があふれ出ています。2、3軒ハシゴする文化もありますが、それでもビールを飲み続けます。

注文と会計はカウンターでその都度しますので、グラスが空になったら代表者がみんなの分を買いに

行きます。それを順番に行うことをラウンドと言ひ、人数×グラス数を飲むハードな飲み会も時たま発生します。もちろん強制する文化はありませんので限界を見極めてつつトライしてみてください。

お話とジョークが大好き

英国人はパブに限らずとにかくしゃべります。会議や講演会でも議論は活発です。年齢、性別、立場は関係ありません。「Yes」か「No」の一言で完了するような簡単な質問をしても非常に長い回答を頂くことが多々あります。五七五の歌を楽しむ国民から見ると、もしかしてまとめるのが苦手なのかなとも思えます。

ジョークも大好物です。社内講習会での「リスクとは何か説明できますか?」「俺の結婚だ!」といったやりとりを始め、終始笑いに繋げようとするのが英国人の特徴です。関西人としてシンパシーを感じます。自虐が好きで失敗談もよく笑いのネタになります。英国に来てから大小たくさんのトラブル

を経験しました。英語の発音が悪く頼んだものと違う飲み物が出てきたり、駐車違反や電車の寝過ごしによって罰金を受けたり、山中で沼にハマって車が動かなくなってしまったこともありましたが、「明日会社で話そう」と思うと気持ちが軽くなります。些細な失敗でもよく笑ってくれますし、同じような失敗談を皆さんお持ちですので自虐は大いに盛り上がります。

世界的なキャラクター達

英国出身のキャラクターと言えば不思議の国のアリス、ピーター・パン、ハリー・ポッター、ネッシー、くまのプーさん、シャーロック・ホームズ、ピーターラビットなどたくさんご存じだと思います。英国全土にその所縁の地があり、地元の方に大事にされ観光コンテンツとしても永く活躍しています。

英国人は空想のキャラクターを取り込むのが上手いと感じます。例えば、シャーロック・ホームズは作中でロンドン市中のベーカー街221Bに住んでいましたが、当時こ



写真3 シャーロック・ホームズが住んでいたベーカー街221B



写真4 キングス・クロス駅にある魔法の世界への入り口



写真5 ブリストルの『Well-hung lover』(うまくぶら下がる恋人)

の番地は実在していませんでした。後にベーカー通りが延伸しこの番地まで辿り着いた際に、シャーロック・ホームズの博物館として整備されました。少し上を見ますとブルー・プラークと呼ばれる青いマークも設置されています。これは英国内の偉人の所縁の地に付けられるマークです。また、ハリー・ポッターで有名なキングス・クロス駅も実は9番線と10番線の間には線路しかなく、ホームはありません(作者の勘違いという説があります)。そのため、近くの壁に特設で9と3/4番線を作り、観光客で賑わう場所となっています。

有名なアーティストであるバンクシーも英国ブリストルの出身であることをご存じでしょうか? バンクシーの絵が描かれるとBBCでもニュースになります。ブリストル以外でもロンドン、ブライトン、マンチェスターなど様々な都市でその作品を見ることができます。ガラスのパネルで保護されている作品も多くあります。保護されていない作品は上から落書きされて

しまうようです。

英国での子育て

5歳の息子と2歳の娘とともに渡英しました。それぞれ地元の小学校と保育園に通っています。英国では日本より半年早く学校が始まります。学校に馴染めるかどうか心配していましたが、子供にとっ

ては「外国」という概念が薄いようで、あっという間にクラスにも馴染みました。

日本とは異なり学校には送り迎えを必ずしなくてはならないため家族間の付き合いにも恵まれています。学校終わりに遊びに行くことを「Play date」と呼び、春から秋にかけてはほぼ毎日どこかの公園か家に行きます。仕事から帰ると週一程度の頻度で家の中で子供達が走り回っていたりします。休日にも友人宅に招いていただいたり、誕生日パーティをしたりと楽しくお付き合いさせていただいています。日本の文化に興味を持ってくさる方も多く、嬉しく思っています。

子供に関する悩み事はどこも同じで「YouTubeを制限したい」「朝起きない」「本を読まない」といったものが多く、どこでも同じことで悩んでいます。当たり前でもあり新しい発見でした。ロンドンならではの悩みとしては「母国語を覚えさせたい」という意見も多く聞きます。英語を第二言語として話す



写真6 ブリティッシュガーデンで開催された母国料理の持ち寄り会

親が多く、子供は第一言語として話すため母国語に触れる機会が少ないというものでした。英語を第二言語として話す親は子供に発音を注意されることも自虐ネタとしてよく話題になります。

子供に対して指導する際はゆっくりやや強めにしゃべる方が多く、決して感情的にならないのが特徴的です(見習わなくてはいけないと思いました)。私と同世代の方は拳骨を食らっていた方もいるようですが、現在の子育てではほとんどないそうです。ただし、英国人も決して感情的にならないわけではありません。参加させていただいた誕生日会にて、カット前のバースディケーキに顔面から飛び込んで食らいついた主役の少年は、その後猛烈に叱られていました。流石にそこまでやると現在の子育て世代の英国人も怒るのかと内心理解しました。ケーキまみれの少年が公園の真ん中で怒鳴られている可笑しい状況でした。

学校行事は日本と同じく運動会や遠足、演劇、ハロウィンの仮装パーティ、クリスマスパーティなど様々あります。英国以外の出身者も多く在席しているため、母国の紹介をする国際祭りという催しも年に一度開催されます。スペースの制約によりブースの数が限られるため、子供の人数に合わせて出店できる国を決める方針となっています。そのため、去年はアフリカ大陸の国が一つも入らないことが分かり、そのことにアフリカ出身の保護者が激怒し会議が紛糾しました。少人数とは思えない紛糾ぶりでした。日本人は大きな派閥の一つだったのですが「別に譲っても良い」との意見で素早く団結し、ブースを一部譲ることで丸く収ま



写真7 ピムス作り・販売中(イタリア人ご夫妻がサクラとして映ってくれました)

りました。全部譲ってしまいそうな日本人を周りが引き留めたのも印象的でした。ブースが縮小してしまったことで私は多国籍チームに放出され、そこでピムスの製造(カクテル用のリキュールであるピムスに柑橘類の果物等とサイダーを適度に入れる)と売り子をさせてもらい、本場のピムス作りを学ばせていただきました。

また、ベビーカーを伴い街中に出ますと大きな段差・隙間に出くわすことが多いことに気が付きます。英国人は「そういうものだ」と理解しているので文句も言いませんし、お互い助け合うことで乗り越える習慣が根付いています。ベビーカーを抱えて階段を上がっていますと男の私でもサッと周りの人が助けてくれますので、いつも感謝しっぱなしです。

これから

2年間の研修も終わりに近づいており、本稿を執筆している傍ら帰国準備を進めています。英国の



写真8 ロンドン市内で私の知る限りの最大GAP(推定:高20×幅30cm)

技術者や地元の方々との交流および現地視察(旅行)を通して英国の状況・技術について見識を深めることができました。建設コンサルタント技術者として海外で働くことができるという貴重な経験や自信も得ました。今後は私が経験したことを日本で水平展開するとともに、日本の技術を世界に展開することも意識して業務に従事したいと考えています。